

■はじめに

教育長としてのこの 6 年間で振り返ると、これまで私は大きく 2 つのテーマをもって校園長先生方に話をしてきたと思っています。1 つは、この修二会に代表される「奈良の町がもつ本物」について、私が体験した感動も含めて触れてきました。それは、子どもたちに奈良で育ったことに誇りをもつこと、いわゆるアイデンティティを確立してほしいからです。



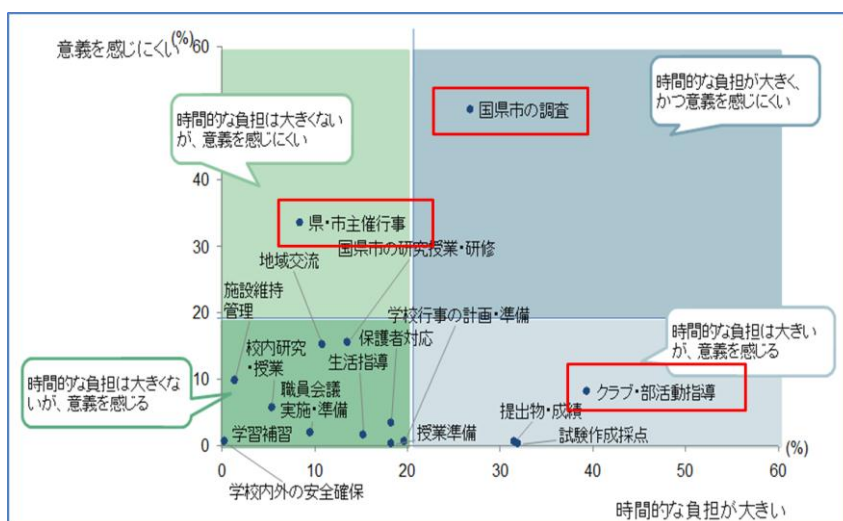
もう 1 つは、「先が見えず正解のない、この 21 世紀をどのように生きていくか」ということについてです。この 2 つのテーマは根っここの部分は同じではないかと思えます。このことについては、また後でも触れますが、今日はまず来年度の教育に関わって話をさせていただきます。

■アンケート調査から

奈良市教育委員会では、教員の多忙化についての実態を把握するため、様々なアンケートを行いました。平成 25 年 8 月に教職員総括安全衛生委員会の教員部会による実態調査、また、今年度になってからは、9 月に教頭先生の業務負担・多忙感についての調査、続いて 12 月には、ウェブを使って、教員の職務についての実態調査も行いました。いずれも、教員の多忙化は、教育改革の最大の、そして喫緊の課題である、と考えているからです。教員の多忙化ということについては、例えば、OECD の調査でも、「日本の教員は世界一忙しい」と発表されたように、今、大きな課題となっています。このことに手を付けずして、教育改革は進まないと考えます。ここの実態を把握して、奈良市の教育を一步前に踏み出したいと思えます。

右の図は、12 月に「教員が何を多忙と考えているのか」を調査した結果です。これは中学校教員の結果ですが、小学校教員も同様の結果となっています。

時間的負担が一番感じているものは、国や県・市からの「調査・報告」です。中学校では、意義を感じるが、負担が大きい業務に



「部活動指導」が挙げられています。負担は感じないが、意義を感じにくいものとして、「国・市主催行事」が挙げられています。

これらの調査や報告や主催行事は、本来はしっかりとした意義をもって行っているものです。それが先生方に理解されていないということも、「意義を感じない」或いは「負担に感じる」という原因の一つだろうと思いますが、「現場の先生方が負担に感じている」という事実については、この調査からも明らかになってきています。このような現場の実態をどうするべきかについて何度も何度も議論をしてきました。

その議論の一つに、10月の校園長会でもお話ししました「奈良市教育振興戦略懇談会」があります。この懇談会で、出席者のひとりである元和田中学校長の藤原和博氏は、「新しい施策をやりたいのなら、まず今ある施策をやめることだ。ビルドする前にクラッシュしなければ、皆のモチベーションが上がらない」ということをおっしゃいました。確かに、新しいものが上に上に積みあがるばかりでは先生方の負担になるだろうと思っています。時代に対応した改革を推進していくためには、思い切った整理が必要なだろうと思います。

教員の意識や研修の在り方についても、アンケートによって実態が見えてきました。「奈良市がどのような教育を行うべきだと思うか」について質問したところ、約7割の先生方が「基礎学力の定着」を行うべきであると選択している一方で、「21世紀型スキルの育成」は5割、私がずっとお話ししてきている「グローバル人材の育成」にいたっては2割に留まってしまっています。この質問は、「当てはまると思うものすべてを選択する」というものでした。

以前から紹介をしていますが、10～20年後には、今ある職種の約47%が機械に取って代われ、2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65パーセントは、大学卒業時には今は存在していない職業に就く時代となるそうです。このような先の見えない、グローバル化する変化の激しい世の中で、どのような子どもを育てていかなければならないのかということについては、まだまだ、現場の先生方の意識の中には入っていません。ここが大きな課題だと思っています。

■トビタテ！留学 JAPAN

ところで、皆さんは右の事業を知っていますか。これは文部科学省と日本学生支援機構が実施する、「トビタテ！留学 JAPAN～日本代表プログラム～」です。この事業は、グローバル人材の育成を掲げ、日本から海外に留学する学生数が、中国・アメリカ・インド・韓国といった主要国と比べ著しく減少している現状を改善するために実施されるものです。2020年を目途に、留学生の数を大学生においては現在の6万人から12万人に、高校生では現在の3万人から6万人に倍増させる目標が設定されています。



また、この事業は文部科学省が初めて取り組む官民協働の事業です。国費ではなく、民間企業から寄附を集めて運用するという画期的な事業であり、日本を代表する企業の賛同を得ています。

奈良市は、このプログラムの一つである「地域人材コース」に応募し、第1次審査を経て、

日本代表プログラムの求める人材像	
i.	日本人学生であって、将来のグローバルリーダーとして、留学を通じて多様な素養を身につけようという 意欲 を有する人材
ii.	グローバル企業や国際機関等における活動を始め、世界で活躍したいという 意欲 、又は日本において日本の良さ、地域の良さを世界に発信し、日本から世界に貢献したいという 意欲 を有する人材
iii.	本制度で実施する事前・事後研修や派遣留学生ネットワーク等における教育課題や本制度における諸活動に主体的に参画する 意思 のある人材

現在採択に向け準備を進めているところです。このプログラムでは、地元の企業に協賛していただき、共に汗を流していただくものです。

私も多くの奈良に縁のある企業に協力をお願いに行きました。手厳しい質問や指摘も受け、私自身も、企業経営のシビアな部分に触れる機会となりました。しかし、説明すると、「この事業の趣旨はよくわかる。なんとか協力したいから、制度や留学

後の計画をしっかりと立ててほしい」といったことを言われました。うれしいことに、多くの奈良の企業が奈良の発展を願って協賛してくださり、もう間もなく仕組みができるだろうというところまでできています。現在のプログラムの対象は大学生ですが、将来、高校生への拡大も行われる予定があります。私は奈良市の中学生も海外留学に出たいと考えています。時代を先取りし、子どもたちにこれから生きる力をつけるために、こういうところからも改革をしていきたいと思っています。

■職員研修のあり方とこれからの教育

さて、先ほど述べた「教員の多忙観」とあわせ、どのような研修をしていく必要があるのかということについても、アンケートで聞きました。その結果は、多くの先生方が研修に参加しづらい状況にあることがわかりました。

私は、現場の先生方には、しっかりと子どもと向き合う時間を確保していただきながらも、研修を受けて力をつけてほしいと思っています。また、指導主事もしっかりと現場の教員と向き合い、学校を支える存在となるようになってほしいと思っています。それが、来年度行なう教育改革の原点の部分です。そのために、これまでの慣例や従来の発想にとられることなく、原点に立ち戻り、「本当に必要なことは何か」ということを考え、大きく転換を行いたいと思います。

まず、現場の多忙化を少しでも食い止め、原因となるものを取り除くために、必要のないものは思い切って整理します。もちろん、今までの学校の営みの中で必要ないというものはないでしょう。しかし、そこをクラッシュして、本当に必要なものをビルドしていかないといけません。「新しい時代だから新しいことをする」では、先生方の多忙化を解消できません。

例えば、多忙の原因となる部活動についても、支援できるシステムを作りたいと思います。研修については、アンケートの結果を受けて、教育委員会から指導主事が直接学校現場に出向いて研修や相談を受けるシステムを構築したいと考えます。教員が変わることで、学校を変え、そして学びを変えることで、21世紀社会を強く生きていく子どもを育てていくことができればと思います。



具体的な施策については、これからの議会の中で審議されていきますが、特徴的な予算としては、タブレット端末を使ったモデル校の拡大やALTの増員、また特別支援教育支援員の増員やスクールカウンセラーの重点配置といった内容もあります。もちろん、これまでも力を入れてきた世界遺産学習と併せて、奈良のアイデンティティを育む教育や、キャリア教育の推進も行っていきたいと思っています。

■おわりに

新しい取組に戸惑いを感じ、立ち止まってしまいたくなることもあるかと思います。しかし、これだけ速いスピードで進む時代ですから、じっと待っていることは下りのエスカレーターに乗っていることと同じです。これからの学校や教員には、グローバル化や情報化、少子高齢化など、社会の急激な変化に伴う諸課題への対応が求められており、また、子供たちにも、答えのない時代を生き抜いていく力を身に付けていくことが求められています。

今、教育は、大きな転換点を迎えようとしています。ここにおられる校園長先生方が自ら先頭に立ち、現場の先生方を引っ張りながら、積極的に教育改革に取り組んでいただきますよう、今からの準備をお願いします。